

東海地方における湧水湿地の分布と特徴(中間報告)

*富田啓介(法政大学),上杉毅(赤津自然観察会),澤田與之(シデコブシと自然が好きな会),
籠橋まゆみ(可児ネイチャークラブ),早川しょうこ(シデコブシと自然が好きな会),
大畑孝二(公財 日本野鳥の会),
小玉公明(おかざき湿地保護の会),大羽康利(渥美自然の会),山田祐嗣(まるっと環境クラブ),
鬼頭弘(日進岩藤川自然観察会)・鈴木勝己(豊田植物友の会),楯千江子(シデコブシと自然が好きな会),河合
和幸(可児ネイチャークラブ),高田雅之(法政大)

東海・近畿・瀬戸内地域を中心とする西南日本の丘陵地には、貧栄養の湧水によって形成された、泥炭の蓄積に乏しい小規模な湿地が点在しており、湧水湿地と呼ばれている。湧水湿地は、絶滅危惧種や地域固有種をはじめとした希少な生物種のハビタットであり、保全上とりわけ重要な生態系である。

2013年に発足した「湧水湿地研究会」では、湧水湿地に関する研究の進展と保全の推進を図ることを目的として、まずは東海地方(愛知県・岐阜県・三重県・静岡県・長野県)の湧水湿地のインベントリ作成に取り組んでいる。2015年7月までに、岐阜県土岐市や愛知県瀬戸市を中心に、合計で約1,100箇所の湿地情報を把握した。この結果、湧水湿地の立地標高の中央値がおよそ250mであること、0.1ha未満の湧水湿地が全体の約75%を占めることなどをはじめとして、立地する場所の物理的特色や水質の傾向、そこに生育する植物種の多寡が明らかとなってきた。しかし、まだ調査データの乏しい地域(愛知県三河地方・岐阜県東濃東部地域・三重県及び静岡県域など)もあるため、解析結果は今後いくらか変化する可能性がある。

今後は調査データの乏しい地域の湿地調査を進めるとともに、豊富な情報があることを活かした基礎的な分析にも取り組んでゆきたい。具体的には、地形・地質・周囲の植生といった空間データと組み合わせることで潜在的な分布を推定すること、植物種の相補性分析を行って保全の優先度・有効な保全の単位を明らかにすることなどである。